令和３年度

神奈川県私立幼園連合会

新規採用教員研修会

テーマ
「保育が楽しいと思えるために」

～今日までの保育を振り返って～

玉川大学　若月芳浩

本日の研修内容

- １学期の保育を振り返って、自身の課題の明確化と2学期の方向性について
- 子どもが楽しいと感じられる時
- 先生の対応の方向性
- 保護者の対応について
- 俯瞰図　A4-Ⅰ　愛情深い保育

よくぞ今日まで頑張ってきました

- 私の１年目は辛かった～
- 夏休みが楽しみでした～
- 友達に会うことでストレスを解消していました
- 分からないことが分からなくて何を聞いていいかわかりませんでした～
- 先輩の保育室をいつものぞいていました
- 保護者との信頼形成に苦労がありました
- 同僚の先生の思いがつかめませんでした

どのように解消すれば良いのでしょうか

- 不安な気持ちや考えていることを言葉に出すようにしていました
- クラスでの子どもとのかかわりはとても楽しかった記憶があります
- 一番近い人に語ることは意識していました
- 保護者には積極的に語るようにしました
- 自分を応援してくれる人には感謝
- 問題を避けて通らないようにしていました

新しい世界に入って
起きていること

- 学習棄却の連続　　アンラーニング
- 新任は新たな学びの連続
- 学生時代に培った学びをベースにしながら新たな学びを自分の中に落とし込む
- 朱に交われば赤くなる
- 学習棄却をしないと辛くなることもある
- 赤くならないようにすると新しいことが入り辛いこともある
- 苦楽しい時間を過ごすためのヒント

子どもの心・自分の心を大切に

- 分からないことが分からない時
- 閉ざさない　→　開く　開けなくなる時がある
- 小さなプライドは捨てて、1年目は自分をオープンにして恥ずかしいなどの思いは捨てた方が楽
- 何でも聞く　→　自分で考えて確認する
- 不安と期待の混在
- 誰もがみんな1年目

自分だけで抱え込まない

- 園はチームです
- 問題を抱え込むと危険です
- 困った時には声に出しましょう
- うまく行かない事が当たり前です
- 子どもとの関係は１人１人が見えてきた事と思います
- 課題が見えた時が保育として重要な時期です　→　２学期に向けて考える事
- 焦って問題を解決する姿勢や態度は危険です　→　１学期の子どもとの関係を振り返る

子どもはなぜ園に来るのか

- 仕方なく来るのか、いやいや来るのか
- 楽しいと思えるために先生方は日々努力
- 楽しいと思えるためには、個々の子どもの思いを理解することが出発になる
- 理解出来ても実現出来ない事もある
- 理解出来るが故に実現出来ないことにジレンマが生じる場合が多い
- では、理解しないのか？ → 理解しましょう!

子ども主体の保育　実現の壁①

- 拙い若月の経験から
- クラスをまとめたい
- 子どもにはみ出して欲しくない
- 活動に積極的に参加して欲しい
- クラスから出て行く子どもがいると責任を感じてしまう
- 保護者の対応で苦手な人がいる時に、少し避けたいような気持ちが生まれてしまう
私自身の主体性の欠如

子ども主体の保育　実現の壁②

- 生活習慣を身に付けさせないと
- 保護者からの要望に応えないと
- 園の先生方の目が気になる
- 自分は保育者に向いているのだろうか
- 保護者への発信が楽しく出来ない情況
- 仕事が面白いと思えなくなる時があった

↓

- 子どもの主体性を大切にする事による変化

子どもの事を信じられるようになった

- 担任として、保育者として「何とかしないと」

↓

- 子どもが園にいる時間は限られている
- 限られた時間を担任や保育者の思い通りになってくれるのは難しい
- 今、目の前の子どもが何を望んでいるのか
- 今、目の前の子どもに何を望んでいるのか
- このギャップを埋めるのにとても時間がかかる　１人１人の顔を浮かべてみてください

子どもが凄いと思えなかった

- 大人の支配下　➡　子どもは凄い部分がある
- 指導・援助　➡　何がしたいのか、どうなりたいのかを考える時間を大切にする
- 大人の声を届けたい　➡　子どもの声を聞いてみよう
- 「この子、とても良く考えている」
- 「そう言う考え方もあるんだね」
- 「なるほど、ではやってみよう」
- 子どもの姿が肯定的に見えてくる

子どもが有能な学び手に見えてくる

- 有能さが見えてくると信頼度が変化する
- 任せる事と時間が増加
- 結果的に子どもの主体性が発揮されるうになる可能性が高い
- 子どもの声を聞こうとする場面が増加
- 何を考えているのか、感じているのかが見えてくる　➡　幼児の内面理解へ
- 以上のようなプロセスを歩む事が私にとっては大きな課題であった

人間理解　子ども理解

- 子どもは大人をどのように観ているのか　？
- 大人は常に子どもに見られていることを意識することがとても重要ではないか
- 子どもは自分の置かれている場を常に意識し、相手(保育者や親、友達)の内面を常に読み取りながら生きている
- 上記の前提から、子どもを理解することが見えない姿が見える時につながる

人とのかかわりが人を育てる

- 発達を理解する目
- 理解が難しい姿が保育者の人を見る目の幅を拡げなければならない状況を作ってくれる
- 障害などの課題がある場合は丁寧にかかることによる理解が重要
- かかわりによる理解は実践知
- 人とのかかわりからの理解
- → 子どもの興味・関心を深く探る目

発達の姿はゆっくりと現れる

- 否定的な目や断定的な目からは発達のが肯定的に見る事が難しくなる可能性が高い
- 乳幼児は対応してくれる保育者の全ての姿から自身の価値を判断する可能性が高い
- 人の瞬時の対応から思いを読み取る
- 肯定的な思いで対応する事によって子どもが本来の姿を現してくれる
- 保育者の思いと発達の関係を理解

先生方にとっての保護者対応

- 担任の場合は応援団を作る
- 失敗やミスは絶対に繰り返さない
- 報告・連絡・相談を絶やさない
- ミスや過ちは真摯に謝罪の気持ちを持って対応する
- 担任ではない場合は多くの保護者と関係を形成する
- 先輩や同僚の対応から学ぶ

保護者対応で大切なこと

- 傾聴
- 受容
- 共感

保護者対応の基礎･基本

- 他者の考えを受け入れる姿勢
- 多様性に共感する姿勢
- 自分の考えを押しつけない
- 注意などは難しい　園長等に委ねる
- とにかく癒される場になること
- 子育てを協力する関係性の樹立

基本的に気をつけること

- 守秘義務　個人情報の保護
- どこまで質問するか　家庭内の事など
- スキル　　相づち　うなづく　目を見る
- 落ち着いてゆったりと静かな口調
- 感情を受け入れる
- 自己の感情に気付く
- 表情を読む

傾　聴

- 「話し手の方のお話を、そのまま受け止めながら聴くこと」
- アクティブ・リスニング　積極的に聴く
- 相手の表情をよく見ながら、「はい」「うん」「えぇ」「そうなんですね」といったあいづちをうちながら、うなずきながら、相手が言った言葉を繰り返したり（オウム返し）、気持ちを汲み取る言葉を伝えながら聴いていきます。

相談者の感情の動き

- 対処困難な衝動・欲求・感情、あるいはその葛藤などを、言語的または非言語的に表現することを通じて意識化、発散することで、症状や問題行動が消失する現象を**カタルシス効果**という。

  カタルシス効果は「心の浄化作用」とも表現される。

相談や子育て支援に必要な保育者としての力

- ◆いわゆる説明責任
- ◆記録すること
- ◆共感する姿勢
- ◆語る力
- ◆観察する力
- ◆瞬時に判断する力
- ◆子どもの育ちの見通しを持つこと
- ◆今後の対応の方向性を示すこと

仲間として生きていく　同僚性

- 先輩が求めていること
- 自分を開いて欲しい
- 課題は分かち合う
- 出発は挨拶から
- サポートは積極的に求め、依存しすぎない
- 後輩を育てたいと思う先輩の願い
- かかわりの違いを理解する

自分らしく歩むために

- 自身のアイデンティティー、保育観、実践のズレの修正
- 自分の時間を大切にするための仕事上の努力
- 悩みや苦しみの共有
- 難しい子どもや親との出会いは結果として自身の力量へと還元される
- 子どもの世界に対する夢を持ちつつ、自分なりのビジョンを形成する

レジリエンスを鍵にして

- 心の回復力
- 心の強さ、しなやかさ
- 自分の中で折り合いをつける力
- 前向きにもう1度やってみようとする力
- 困難で脅威的な環境でもうまくやっていくことができる過程・能力・結果
- ストレスや葛藤のある状況のまとで精神的な均衡を保つ力

レジリエンスの三つの要素

- 新奇性追求　興味・関心・未知のことを知りたいと思う欲求と意欲
- 肯定的な未来志向　明るく楽しく過ごせると思っている。将来に対して肯定的。
- 感情調整　自分の気持ちを調整することが出来る。感情に振り回されない。

悩みや苦しみの共有

- 学生時代からの仲間の大切さ
- 新しい職場での仲間作り
- 愚痴はとっても大切
- 大切なお給料を楽しみとして
- 仕事上の困難は永遠に続く
- かかわりの難しい子どもは育ちもしっかりと見える時が来る

この仕事の喜び　夢の実現

- ３年は苦しいことが大半
- 子どもの笑える姿に喜びが生まれる
- 対話　語り　読み取り　記録　共有
- 省察　振り返り　自己課題の発見
- 学び続けること
- 辛い時には辛いと言えること
- 子どものために生きる喜びを

倉橋惣三 「育ての心」より
大正･昭和期の幼児教育の研究実践家

1882.12.28(明治15)～　1955.4.21(昭和30)

　それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者。育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である。